書評

白崎昭一郎著

郷土史夜話 ―えちぜん―わかさ―

三上一夫

古代からの県内の歴史を中心に、二十二のテーマを設定して、それぞれについて論じている。本書は白崎氏が昭和四十六年から五年余にわたり、雑誌「北陸通信」に連載したのをまとめたものである。

周知のとおり白崎氏は、医師でありまた作家としてはもちろん、とくに古代史研究家としても著名で、すでに『継体天皇の研究』・『埋れた王国』の優れた著書を公刊している。

本書では、「継体天皇は実在したか」（第一章）・「若狭の古墳」（第三章）・「越前の古墳」（第四章）・「縄文時代の福井県」（第六章）・「福井県の後期古墳」（第九章）などの古代史の分野に加え、中・近世史の新田義貞、朝倉氏、蓮如、橋本左内、さらには幕末の越前藩の動向はじめ、「和紙の里」（一六章）・「若狭の塩」（第二十二章）などのはなはだ興味ぶかいテーマまで取り上げている。

医師の立場からの自然科学的分析方法が巧みに導入され、しかも歴史学の基本をふまえた実証的研究視角は、大いに注目すべきところである。また本書の序文で、広島大学教授重松明久氏が「著者の文学者としてのするどいセンスに基づき、これまでの歴史学の欠陥部分を、埋めるべき新しい歴史の総合的解釈への提言が、至るところに看取されるといっても過言ではなかろう。」と高く評価しているが、たしかに一方において白崎氏特有の作家としての迫力のある明快な筆致は、きわめて魅力的で、一般の読者層にも大いに啓蒙的で親しまれる歴史書であると思考される。

（北陸通信社刊、二六六ページ、一、五〇〇円）